町立図書館 町史だより

西原のことば ～その⑨～

まつりのなかのことば・小波津

ミーニシ（新北風）の季節も過ぎ、日ごとに寒くなりましたね。冬の到来を告げるトゥンジービーサ（冬至寒さ）がやってくると、亜熱帯の沖縄でも本格的な冬に突入します。沖縄の冬は本土ほど気温は下がらないものの、四方を海に囲まれているため風が強く、体感温度は低くなります。体調をしっかり整えて二〇〇六年を無事に終えたいものですね。

今年最後の町史だよりは、小波津の普天間拝みを紹介したいと思います。

普天間拝み（十月三十日）

普天間拝みは旧暦九月九日に行われる字の行事です。お話によると、この日の拝みは小波津からよその地域へ移住した人たちの健康を願うために行われる拝みだといい、自治会長をはじめ役員の方たちが宜野湾市普天間にある普天満宮（ふてんまぐう）、神宮寺（じんぐうじ）（普天満山神宮寺）へ参り、拝みをします。

また、この日はクングワチクニチ（九月九日）とよばれる各家庭で行われる健康祈願の行事もあり、チクザキ（菊酒。菊の葉を浮かべたお酒）を仏壇や神棚に供えて家族の健康と長寿を祈願し、チクザキをいただいたといいます。さらに、小橋川ではティラウグワン（寺御願）と称して、普天満宮へ詣でて健康を祈願し、棚原では一日から九日までの間に円覚寺に参り、酒、花米、赤ウブクを供え、女性は弁財天堂まで回り美容を願ったそうです。

★

午後一時過ぎ、集落センターに集まった参加者が、車で普天満宮、神宮寺に向かいます。

普天満宮に着くと、拝殿の一角に設けられた参拝者用のスペースに、ムラのビンシー、果物（オレンジ・みかん）を並べ、火をつけない線香（二本×三組）を供えて拝みます。次に、隣接する神宮寺へ参ります。本堂での供え物は普天満宮と同じビンシー、果物、線香でしたが、線香は二本だけを供えました。

普天満宮での拝み

神宮寺での拝み

普天間へのウトゥーシ

普天間での拝みが終わると小波津へ戻り、シチャヌヤマ（下ヌ嶽）の裏側にある香炉の前で普天間へのウトゥーシ（遥拝）が行われます。お話では、本来ウトゥーシを拝むのは悪天候などにより普天間まで行くことができないときだそうですが、現在では普天間へ行ったときでも拝むようになっているとのことでした。ここではビンシー、果物、線香の他に重箱もお供えして拝みをします。

すべての拝みが終了した後、集落センターへ戻り、ウサンデーをいただきました。

故郷を離れ、遠い場所で暮らす村人の無事を願う心は、いつの時代も変わらないものなのかもしれませんね。

【参考文献】
西原町史編纂委員会『西原町史』第四巻／沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』／岩波書店『広辞苑』第五版／袋中『琉球神道記』／宜野湾市史編集委員会『宜野湾市史』第五巻／加治順人『沖縄の神社』

★普天満宮と神宮寺

普天満宮は琉球八社の一つで創建年代は不明、『琉球神道記』（一六〇八年）には普天間権現と記されています。現在は普天満宮という名称が用いられていますが、『宜野湾市史』によると戦前までは普天間宮が正式な名称だったそうです。戦前まであった普天間宮に続く街道は、ジノーンナンマチ（宜野湾並松）の名で知られ、普天間宮参詣の参道でした。

普天間宮は洞窟内に熊野権現を祀り、琉球国王の参詣も行われていました。また、普天間宮には数多くの伝説が残されており、古くから民間信仰の対象となっていました。洞窟内には、竜宮神、普天間女神など土着の神々も合祀されています。遠く糸満や那覇垣花の船持ちたちも、進水、出漁の折には航海や旅の無事を祈り、普天間宮を参詣するならわしであったようです。

普天間宮を含む琉球八社の特徴は、真言密教の影響を強く受けたことです。そのため、神社に仏寺が置かれ、普天間宮には神宮寺が併置されました。しかし、廃藩置県に伴う神仏分離政策の結果、神宮寺は普天間宮より独立し、現在に至っています。

琉球八社…波上宮、沖宮、識名宮、普天間宮、末吉宮、安里八幡宮、天久宮、金武宮の総称